

創生学部到新設される「DX 共創コース」について、
創生学部3年小松桃果さんが、熊野英和教授に
お話をうかがいました。

小松桃果さん

熊野先生、まずはDXとは何でしょうか？

熊野教授

DXとは、Digital Transformationの略語です。具体的にはデジタル技術を用いた価値創造や社会変革ということですが、その前段階である情報のデータ化(Digitization)、作業のICT化(Digitalization)を経て到達する、人、地域、社会を再構築する価値の共創的過程という、既存の学問分野を越境する極めて広範な概念です。

小松桃果さん

創生学部ではDXをどのように学んでいくのでしょうか？

熊野教授

具体的な課題を知り、今ある・使える技術を知り、それらをどのように組み合わせればより良い解決に迫れるのか、主としてデジタル技術の観点から考えて行きます。デジタル技術というと理系的要素が強いように思われるかもしれませんが、実は難しい数学や物理の知識は必要ありません。DX関連の諸技術の原理を1から理解することも大切ですが、それと同等あるいはそれ以上に、現実課題に対し、関連技術の上手で創造的な使い手となることが求められています。我々人類は宇宙の始まりや人類誕生、体や脳のしくみを理解してはいませんが、それでも日々生きてそれぞれの課題解決に取り組んでいます。DXもこれと同じこと。文系の学生でも、いわゆるソフト理系の学生でも、無理なくしっかり学べます。もちろん、数学や物理の素養があって損することは決してありません。より発想は広がるでしょう。

小松桃果さん

創生学部の文理融合的な課題解決型学修そのものですね。

熊野教授

その通りです。課題発見には文系的な素養が不可欠ですし、その解決には技術的知見も欠かせません。課題解決や価値創造というのは総合科学。総合芸術と言ってもいい。学生時代、いかに引き出しを多く持てるかが後々効いてきます。デジタル技術を知れば、自らができること・見えるものが格段に広がり、自分の可能性も大きく拡げることができます。DX共創コースでは、プログラミングや各種IoTツール、データ計測、AI、自然・社会現象のモデル化(数式化)等々、DXを進める上で必要となる基礎を、実践を伴いつつバランスよく学んでいきます。DXの世界は広く深く、理論だけでも実践だけでも、また理系だけでも文系だけでもないのです。

小松桃果さん

DX共創コースと創生学修コースの関係性はどうか考えたら良いでしょうか？





熊野教授

学びの最終目的は、先人たちが努力して蓄積してきた知に something new を加え、今までにない何かを「創造」できる力を獲得することです。課題解決や価値創造の要でもある「創造性」は、ゼロから何かを生み出すことではありません。多くの経験や知識を得て、他の人が思いもよらない、今までにあるもの同士の、今までにない組み合わせから生まれるのです。これまで分断されてきた文系分野と理系分野の

両方に触れ、その両者の知識・経験を持って「つなぐ」意識を持つことができれば、そこから引き継がれた知のブロックの新たな一段となる、新しい発想や創造性が生まれるでしょう。DX 共創コースも創生学修コースも、多面的で複雑化した課題を抽出し、その解決に必要な知識を主体的に獲得し、分野の異なる他者と協働し、論理的思考と科学的根拠に基づいて、広く社会課題の発見とその解決を先導できる人材の育成を目指していますが、DX 共創コースでは主としてデータ・デジタル関連技術を軸とした学修を進めるのに対し、創生学修コースでは主として課題と関連する諸分野の知識を軸とした学修を進めていきます。

小松桃果さん

領域学修科目パッケージに特長があると聞いていますが？

熊野教授

DX 共創コースでは2年次以降に情報社会デザイン科学パッケージの科目群を履修することになりますが、ここにはデジタル・データ関連の科目以外に、人文社会系の教員が提供する科目も多く含まれ、技術とそれを適用する先の分野、また経営関連の知識を分野横断的に学修することが可能です。

小松桃果さん

ありがとうございました。最後に高校生の皆さんにメッセージをお願いします。

熊野教授

新潟大学は国立総合大学で、理・工・農・人文・法・経済科学・教育の各学部が同じキャンパスに立ち並んでいます。この規模でこのように多数の学部が集約されている大学は、全国的に見ても実は非常に珍しいのです。あなたもこの恵まれた教育的資源を最大限に活用し、DX を学んで何かと何かをつなぎ、新しい何かを創造する力を修得してみませんか？